

日本中東学会ニューズレター

JAMES

NEWSLETTER

No. 126

2011/11/5

目次

第 28 回年次大会のお知らせと研究発表の募集.....	2
第 17 回日本中東学会公開講演会	
「庄内からイスラームを考える」.....	4
『日本中東学会年報（AJAMES）』編集委員会報告.....	4
理事会報告.....	5
ニューズレターのデジタル化についてのアンケート結果報告.....	7
韓国中東学会参加記.....	8
日本学術振興会カイロ研究連絡センターの今日この頃.....	12
会員の異動.....	14
寄贈図書.....	15
事務局より.....	17
編集後記.....	17

第 28 回年次大会のお知らせと研究発表の募集

来年度の年次大会は、東洋大学で開催されることになりました。大会の実施要項・研究発表応募要項が下記のとおり決定しましたのでお知らせいたします。大会は、例年通り、1 日目が公開シンポジウムと総会、2 日目が研究発表になります。会員の皆様には、積極的なご参加により大会を盛り上げて頂きたい、お願い申し上げます。

開催日時：2012 年 5 月 12 日（土）・13 日（日）

開催場所：東洋大学・白山キャンパス

実行委員会

委員長：三沢伸生

事務局長：子島進

委員：安藤潤一郎、小笠原弘幸、栗山保之、柴山
滋、長津一史、平野淳一（以上、東洋大学）、
新井和広、臼杵陽、尾崎貴久子、佐々木紳、
貫井万里、藤木健二



東洋大学白山キャンパス（同大学 HP より）

研究発表応募要項は以下のとおりです。研究発表をお考えの方は、下記をお読みの上、ご応募ください。

1. 研究発表

研究発表を希望される方は、12 月 9 日（金）までの間に年次大会実行委員会までメール（james2012toyo@gmail.com）にてご応募ください。メール発信が不可能な方は文末の連絡先まで、郵便にて上記の日付必着にてご応募ください。（FAX ではお受けできません。）応募の際、下記の点をお知らせください。

- ①氏名（ローマ字表記を併記）、所属（大学院生の場合はその旨を表記）、連絡先メールアドレス
- ②発表タイトル（仮題も可）と発表のおおよその骨子（発表言語が日本語の場合は 400 字程度、日本語以外の場合は 200 words 程度で、内容とテーマが分かるもの。正式の「要旨」は、実行委員会での採否の決定後、改めて発表予定者に執筆をお願いすることになります。）
- ③使用希望機器をお申し出下さい。（プロジェクター等の台数に限りがありますが、

可能な限りご希望に応えるようにします。また、パソコンは可能な限り発表者ご自身でご用意ください。)

2. 企画セッション

第28回年次大会では、会員による企画セッションも公募します。今大会では、昨年度大会と同じく、国際化推進の観点から日本語以外の言語によるセッションのみ募集します。特定のテーマについてセッションの企画をご希望の方は、以下の要領でご応募ください。締め切りは、研究発表と同じく12月9日(金)です。

持ち時間は、発表・コメント・質疑応答を含めて1時間30分で、発表者は3名程度とします。コメンテーター(討論者)をつけるかどうかは自由ですが、司会者は必ず1名必要です。発表者と司会者、およびコメンテーターはすべて日本中東学会会員であることとします。企画責任者は、①企画セッションのタイトル、②企画の趣旨(400 words程度)、③企画責任者の氏名(ローマ字表記を併記)、所属、連絡先メールアドレス、④発表者の一覧(氏名[ローマ字表記を併記]、所属)、⑤各発表者の発表タイトル(仮題も可)とその骨子(200 words程度)、⑥使用希望機器、を年次大会実行委員会事務局までメールでお知らせください。司会者とコメンテーターは応募の時点で確定していなくてもかまいません。なお、調整の都合上、企画の内容について、事務局から適宜問い合わせ・ご相談をさせていただくことがあります。

3. 託児所

託児所の利用を希望される方は、大会実行委員会事務局までお申し出ください。

4. 宿泊について

年次大会の開催時期は、ゴールデンウィーク翌週になりますが、年次大会へ参加予定の方は、十分余裕を持って宿泊予約されることを強くお勧め致します。

以上、どうぞよろしくお願い申し上げます。

連絡先

日本中東学会第28回年次大会実行委員会事務局
〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20 東洋大学アジア文化研究所気付
Tel : 03-3945-7490
Fax : 03-3945-7513 (共用)
E-mail : james2012toyo@gmail.com

(可能な限りメールでご連絡・お問い合わせいただければ幸いです。)

(三沢伸生)

第 17 回日本中東学会公開講演会「庄内からイスラームを考える」

今年度の日本中東学会公開講演会は、大川周明や内藤智秀などのイスラーム研究の先達を生み出した地である山形県酒田市において、酒田市・酒田市教育委員会・酒田市立図書館・光丘文庫・大川周明顕彰会の後援を得て、「庄内からイスラームを考える」というテーマで開催します。お誘い合わせのうえご参加ください。

日時 2011 年 11 月 12 日（土）13：30～17：00

場所 山形県酒田市総合文化センター

プログラム

講演 長沢栄治「アラブ革命と日本」
白杵 陽「大川周明のイスラーム研究」
三沢伸生「内藤智秀とイスラーム」



↑ 酒田市のマンホール

パネルディスカッション

司会：加藤博

コメント：佐藤昇一（大川周明顕彰会『秋霜』編集主幹）

ディスカッサント：上記講演者および松長昭

以上

（白杵陽）

『日本中東学会年報（AJAMES）』編集委員会報告

『日本中東学会年報』（AJAMES）編集委員会より、ご報告いたします。

1. 27-1 号、27-2 号編集中

現在、27-2 号の編集作業を鋭意進めております。同号は来年 1 月に刊行を予定しています。

2. 投稿原稿締切のお知らせ

次回の投稿締切は 12 月 1 日です（昨年より 20 日前となっております）。論文、研究ノート、書評、中東研究博士論文要旨、特集などの投稿をお待ちしております。

またこれまでたびたび総会などの場をお借りしてお願いして参りましたが、本誌は欧文雑誌として会員のみなさまの研究成果の普及をめざしておりますので、欧文原稿ございましたら是非投稿ください。

3. 本誌に関するお問い合わせ

本誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下の通りです。

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

東京外国語大学総合国際学研究院 青山弘之研究室気付

『日本中東学会年報』編集委員会

ajames-editor@tufs.ac.jp

(青山弘之)

理事会報告

【2011 年度第 3 回理事会】

日時：2011 年 10 月 22 日（土）11:00～12:45

場所：早稲田大学 8 号館 B106 教室

出席：臼杵陽、小松久男、桜井啓子、小杉泰、東長靖、飯塚正人、三浦徹、山岸智子、新井和広

欠席：長沢栄治、酒井啓子、大稔哲也、林佳世子、黒木英充、青山弘之

[議題]

【報告事項】

1. 事務局報告

入会者数、退会者数、会費納入状況、年次大会準備状況が報告された。本年度は入会者が例年よりも少ないこと、今後会員が減少する可能性が指摘され、その対応について意見を交換した。

(第 28 回年次大会については、「第 28 回年次大会のお知らせと研究発表の募集」参照)

2. AJAMES 編集委員会報告

AJAMES 27-1、27-2 の編集状況について報告がなされた。(詳細は「『日本中東学会年報 (AJAMES)』編集委員会報告」参照)

3. 国際交流担当報告

第 27 回年次大会において、韓国中東学会から 2 名を招聘するために国際交流基金から受けた助成金について報告がなされた。

4. 財務・会則担当報告

報告事項は特になかった。

5. 企画担当報告

第 17 回公開講演会準備が順調に進んでいること、第 18 回講演会の企画等について報告がなされた。また、本年度も科学研究費補助金に応募することが確認された。

(本年度の公開講演会の詳細については「第 17 回日本中東学会公開講演会「庄内からイスラームを考える」」参照)

6. 渉外担当報告

地域研究会連絡協議会の活動について報告がなされた。

7. ニュースレター担当報告

125 号が 2011 年 7 月 14 日に発行されたこと、126 号が 2011 年 11 月 5 日発行予定であることが報告された。

8. ウェブサイト担当

日本中東学会ウェブサイト移行先サーバとドメイン名が決定したこと、新ウェブサイトへの移行は、可能であれば年内を予定していることが報告された。

9. 韓国中東学会大会報告

韓国中東学会大会に参加した臼杵会長、新井事務局長から報告があった。(詳細は「韓国中東学会参加記」参照)

10. その他

特になし

【審議事項】

1. 日本中東学会ニュースレターの電子媒体への移行について

ニュースレター電子化について会員の意見を求めたところ、問題ないとする意見が回答総数の 95%を占めたことを受け、電子化に向けて動き出すことが承認された。今後は具体的な移行方法、個人情報保護、ネットを使用しない会員への対応等を検討した後、会員の最終的な意志の確認を再度行うこととなった。

(詳細は「ニュースレターのデジタル化についてのアンケート結果報告」参照)

2. 2013 年度大会開催校について

2013 年度大会開催校について、検討を行った。

3. WOCMES 開催要請について

次回中東学会世界大会 (WOCMES) について、日本での開催を打診されたが、現時点では日本での開催は難しいとの結論に達した。

4. 名誉会員について

名誉会員制度、または終身会員制度設置の可能性について、検討すべき点を

まとめて理事会で協議することとなった。

5. 次期 AJAMES 編集委員長について

AJAMES 編集委員長の任期が今年度末までであることを受け、次期編集委員長の選出について協議を行った。

6. その他

日本中東学会第 28 回年次大会実行委員メンバーを承認した。(実行委員については「第 28 回年次大会のお知らせと研究発表の募集」参照)

(事務局)

ニューズレターのデジタル化についてのアンケート結果報告

前号のニューズレターで、電子版ニューズレターへの移行について、事務局とニューズレター担当理事の考えをお知らせするとともに、会員の皆様の意見をお知らせいただくようお願いしました(『日本中東学会ニューズレター』No.125、41～42 頁)。おかげさまで 2011 年 10 月 19 日までに 162 通という多数の返信葉書をいただきました。貴重な御意見をいただき、ありがとうございました。

その結果ですが、現在のところニューズレターのデジタル化について、

- | | |
|-----------|-------|
| 1. 問題はない | 155 通 |
| 2. 不都合である | 7 通 |

となっております。

「不都合である」と回答された会員が理由として挙げているのは、コンピュータを持っていないので電子版では読むことができない、ファイルのサイズが大きくなるのが予想されるのでダウンロードに時間がかかる、個々の会員にウェブサイトへのアクセスを求める形式になると読まれる率が下がる、電子版では読まないと思う、保存という面から紙媒体が好ましい、電子版では目が疲れる、等でした。御本人の都合だけでなく、学会の中でニューズレターをどのように位置づけるべきなのか、または実質的な読者数の変化はどうなるのかという点からも意見が寄せられたことは学会運営に携わる人間としては嬉しい限りです。

また、「問題はない」との回答を寄せられた会員からのコメントは、早急に電子版に移行してほしい、電子化は時代の流れである、個人情報管理の点さえクリアできれば積極的に電子版に移行すべき、環境保護にもなる、紙媒体では場所を取り保存が大変である、経費節約になる、等でした。

また、「問題はない」ものの、電子版への移行について必ずしも 100 パーセント歓迎ではない、または不安な点があるという意見も寄せられました。たとえば、1986 年以來ずっと冊子体だったものが無くなるのはニューズレターファンとして一抹の寂しさを感じる、ウイルス等からの防御策に留意すべき、個人情報管理

をしっかりと行なってほしい、ニューズレターの公開は会員のみにしてほしい、大会報告は分量があるので紙媒体の方が読みやすい、重要な決定事項や情報が掲載されている号は紙媒体で発行したほうが良い、等です。ニューズレターのファンがいらっしゃるという事実には正直申し上げて心を動かされました。紙が単なる印刷媒体以上の意味を持っているという点を再認識しました。

電子化に際しての、ニューズレターへのリクエストも複数ありました。文字を大きめにしてほしい、できれば印刷が容易な A4 版でニューズレターを発行してほしい、退会者を列挙するのはやめてほしい、電子化することで浮いた経費がどのように使われるのか知りたい、メールの容量があまり大きくならないようにしてほしい等でした。

いただいた葉書を読んでいて気づいたのは、電子化後はメールにファイルを添付する形式でニューズレターが送られて来ると誤解されている会員の方が複数いらっしゃったことです。会員数 700 名程度の学会で使用しているメールリストで添付ファイル付きのメールを定期的に送るとサーバへの過剰な負荷が予想されますので、当学会で使用しているメールリストはファイルを添付できないように設定しております。メールリストでお知らせするのはあくまでニューズレター発行のお知らせと、ダウンロードサイトのリンク (url) です。過大な容量のメールを届けることはありませんので、ご安心ください。詳細につきましては、さらに諸問題を検討したうえで、次号のニューズレターでお知らせいたします。

アンケートには多数のご回答をいただきましたが、諸般の事情で期日までに回答できなかった方もいらっしゃるでしょう。回答できなかった会員の方々に、上記の問題以外に何かお気づきの点がある場合には、前号のニューズレター送付の際に同封した葉書ないしは別の手段で学会事務局までご意見をお寄せください。

全体としては、ニューズレターの電子化移行に「問題はない」との回答が、回答総数の 95 パーセントを超えるという結果になりました。これを踏まえ、学会内に情報格差を生まないことを念頭におきつつ、学会として今後のニューズレターのあり方を考えてゆきます。さらなるご協力とご愛読のほどをお願い申し上げます。

(事務局・山岸智子)

韓国中東学会参加記

韓国中東学会に参加して—韓国のサバイバル戦術を学ぶ？

2011 年 8 月 31 日から 9 月 2 日まで韓国中東学会 (KAMES) の国際会議に出席するために新井和広事務局長とともに秋晴れのソウルを訪問した。KAMES の大会等に参加するたびに同学会の「進化」ぶりには驚かされる。その進化は新時代

に対応したものだということができる。どういうことかという、同学会は韓国社会にその存在意義を示して、まさにサバイバル戦術として国際的学術大会を開催しているといった感じなのである。

今回、KAMES に招待されて参加したのだが、同学会の会議が実は予想もしなかった（あるいは事前にきちんと認識していなかった）「Broadcast World Wide (BCWW)」という大きな国際会議の一翼を担うものだったということなのである。あとで述べるように、KAMES もその統一テーマの下で組織されたのである。したがって、会議前日のレセプションはこの BCWW 全体のためのものであって、KAMES 以外のたいへん多くの参加者がいたのである。さらに肝をつぶしたのが、レセプション冒頭のアトラクションであった。最初に男性若者グループのパフォーマンスであり、次がKポップスの人気女性グループ（らしい）f(x)、つまりエフェックスであった。キム KAMES 会長に尋ねるとそのグループの名前を知らなかった。しかし、若い女性会員が知っていた。まさに世代間ギャップというのだろうか、「芸能」情報に関する感知度の違いがこのようなところにも表れている。この女性グループはインターネット上で「エフェックス+韓国」で検索すれば日本語でも 20 万件近くヒットするので、おそらくたいへんな人気グループなのであろう。

韓国中東学会主催の国際会議であるにもかかわらず、なぜこのようなことを書き綴っているかといえば、実は今回の会議のテーマが中東・中央アジアにおける「韓流」についてだったからである。英文タイトルは Korean Wave in the Islamic Middle East and Central Asia: the Present state and Future prospect で、韓流 (Hallyu) を議論しようというわけである。日本でも韓流ブームはたいへんな盛り上がりであり、この点に関して贅言は要しないだろう。実際、ネット上でフジTVがあまりにも多く韓流ドラマを放送して、それへの批判の声が上がって、デモまで起きたという話題はさっそくこの会議の報告でも取り上げられた。北大スラ研やアジ研に何度か招聘されて日本でもよく知られているカザフスタンの German Nikolayevich KIM 氏が基調報告の冒頭でフジTVの問題に触れたのである。

私自身は The Middle East : the Broadcasting Market, the Culture Code, and the Content Industry というセッションで、イランの Zeinab PIRI によるイランの韓流ドラマの影響に関する報告とともに、Japanese Influence on Arab Culture : A Special Reference on Animations and Films と題してアラブ世界におけるマンガ・アニメ人気を中心に黒沢映画や宮崎駿のアニメ作品を絡めて議論をした。言うまでもなく、アラブ世界のポップカルチャーの専門家でもない私がこのようなテーマで喋らざるをえなくなったのも、KAMES の国際会議が予め BCWW の統一テーマの下で開催されたためである。KAMES メンバーも同様に専門外のテーマについて報告したとのことであった。

さらに、この国際会議は韓国政府による新設の機関である韓国コンテンツ振興院（KOCCA）がスポンサーとなっていたために、テーマ自体は動かせないという事情があり、やむなくこのようなテーマで話をせざるを得なかったという。JAMES 会員は KOCCA についてご存じない方がほとんどであろうから、ネット上の説明をそのまま引用する。すなわち、KOCCA は「韓国コンテンツ産業の振興のため 2009 年 5 月に設立された政府系機関であります。これまで、放送・ゲーム・アニメーション/キャラクター/大衆音楽など別々に運営されてまいりましたが、韓国政府の方針により、この度、振興組織を一つに統合し、コンテンツ産業総括の振興専門機関として新しく生まれ変わりました」ということであり、KAMES も今回の会議では韓国の国家戦略の一翼を担ったということなのである。

KAMES に招聘されるたびに学会と政府との関係という観点から JAMES との温度差がどんどんと広がっていることを痛感するのであるが、今回は KAMES の国家戦略に沿ったサバイバル戦術には驚かされた。同時に、韓流ブームとはいっても官民一体の協力体制の下で推進されていることを強く感じざるを得なかった。まだまだいろいろと書き足りないことがあるが、紙幅の関係もあり、このあたりで終わりにする。しかし、KAMES が通常の学術的な年次大会 2 回の他にも、このような官民一体となった大規模な企画をこの数年来ずっと行っていることを考えると、やはり彼我の学会の性格の違いとその力量の差と言い切るだけでいいのかとつい考え込んでしまうのである。

（臼杵陽）

韓国中東学会（KAMES）2011 年大会に出席して

私は日本中東学会事務局長として、2011 年 8 月 31 日と 9 月 1 日の 2 日間にかけてソウルで開催された韓国中東学会大会に出席した。韓国に行くのは 1997 年以来 14 年ぶりで、韓国中東学会大会に参加するのは初めてである。大会の会場になったのは、ソウルとは言っても新しく開発された江南（カンナム）地区にあるコンベンションセンター（COEX）の国際会議場で、会場周辺は仏教寺院ひとつを除けば日本とほとんど同じ街並みが続いていた。

大会全体の構成と雰囲気は、臼杵会長の報告の通りである。初日の夜に開かれたレセプションでは、韓国のアイドル 2 グループがパフォーマンスを行ったのに加えて、抽選で iPad2 が当たるといふ余興もあった。早い話、学術会議が単体で開催する大会とは比べ物にならないほどの規模と豪華さであった。実際のところ、レセプション会場でゲストが囲んだ丸テーブルは 20 程度あったが、韓国中東学会大会参加者はそのうち 2 つを占めているだけであった。のこりはいわゆるコンテンツ業界関係者や、海外から来たバイヤーであろう。

初日の熱気に圧倒され、どうなることかと思っていたが、翌日（2011 年 9 月 1

日)の研究発表は普通の学術会議の雰囲気の中、淡々と進んでいった。

今回の大会のテーマは、「中東と東南アジアにおける韓流:現状と将来の見通し」ということで、先方からは、中東における日本のアニメ、映画の浸透についてペーパーの発表者1名、コメンテーター1名を立ててほしいという依頼を受けていた。つまり、韓流の比較対象として日本の事例を紹介するという役割が与えられた。ペーパー発表者は臼杵会長が、コメンテーターは私が引き受けることになった。学会としての招待ということで、被招待者は日本中東学会の会長および事務局長となっているが、発表テーマがあらかじめ指定されているというのは新鮮であった。

プログラムは、9時30分から16時50分までの間、2つのキーノートスピーチと3つのセッション(8つの発表)で構成されていた。キーノートスピーチを行ったのはウズベキスタン国営テレビ・ラジオのFatikh Djalalov氏とカザフスタン戦略研究所のGerman Nikolayevich Kim氏の2人であり、それぞれウズベキスタンのマスメディアの発展と、中央アジアにおける韓流を通じた韓国文化の広がりについて報告がなされた。

それに続くセッションでは、アニメーションや映画を通じたアラブ文化への日本の影響(臼杵陽)と、イランの文化と経済に対する韓国映画・ドラマの影響(Zeinab Piri)の2つの発表があった。日本側の発表とコメントは、中東における日本のアニメーションや映画の歴史の紹介と分析である。特に強調した(と少なくとも私が思っている)点は、それらのコンテンツが欧米経由で入っているため、いわば他文化のスクリーニングを経ていること、アニメーションやゲームが、日本からの輸出から現地における生産にシフトしていること等である。Zeinab Piri氏の報告は、イランにおいて韓国映画・ドラマが広く受け入れられている理由を、両国の文化の共通点に求めたものだった。その後、午後には2つのセッションが開かれたが、それらの発表は韓流や韓国文化がトルコ、アラブ世界、湾岸諸国でどのように受け入れられているかということ、それぞれの地域・国と韓国の文化の共通点、相違点などを中心に報告したものであった。

議論のほとんどは各国における韓流の現状ではあったが、日本の事例も紹介されたので、日韓の比較もなされた。特に韓国のドラマが中東や中央アジアで広く受け入れられている反面、日本の最近のドラマは振るわず、そのかわりアニメだと日本製のものが中東を席卷しているという理由についての質問が出た。当然、複合的な理由が考えられるが、そのひとつとして、外国で受け入れられるような物語を創る才能が、韓国ではドラマに、日本ではアニメーションに集中している可能性が指摘された。ドラマにせよ、アニメーションにせよ、物語を通じた東アジア、中央アジア、中東の文化的な関係は、今後の発展が見込める興味深いテーマだと感じた。

全体として、大会そのものは成功におわったと言ってよい。日本と韓国におけ

る中東研究の位置づけの違いというものもよく分かったし、何より自分たちの研究分野が国家の命運と直結しているという意識を（本人達の口から直接出なかったとしても）主催者側が持っているということがよく分かる大会であった。

ひとつ残念だったのは、韓国の若手研究者と交流する機会があまり与えられなかったことである。確かに発表者や聴衆の中には若手研究者もいたが、韓国中にいる研究者が一同に会してお互いの成果を発表しあうという形式の大会ではなかったため、たとえば私が期待していたイエメン（またはハドラマウト）研究を行っている人に会える可能性は、はじめからほとんどなかったと言っていいたいだろう。当然、そのような形の大会も年2回開催されているようだが、その際に使用される言語は韓国語で、外国人研究者を招く大会とは切り分けられているとのことである。先方からいただいた『韓国中東学会論叢』第32-1号にはLee Hee-Sooという研究者による「Middle-Eastern Perception of Southeast Asia: Based on the Relationships between the Ottoman State and Southeast Asia」と題された論文（韓国語）が掲載されており、機会があれば著者と是非話をしてみたいと思った。

（新井和広）

日本学術振興会カイロ研究連絡センターの今日この頃

日本学術振興会は、全世界に計10箇所の海外研究連絡センターを有している。中東には1960年代の半ばから、西アジア地域研究センターという名称でテヘランに拠点が置かれていたのが、1979年の革命の折に一時アンカラに移動し、それがさらに84年からカイロに移った。学振カイロの初代の所長は、先般亡くなられた佐藤次高教授であり、その後中東学の頭学が歴任した。それから、既に27年ほどが過ぎたことになる。一時、政府の見直しで存続が危うくなったが、当学会等の強い訴えもあって、昨今はやや落ち着いてきたように思われる。私がこの学振カイロに赴任したのは、本年初頭のエジプト政変からいくばくもなく、かつ日本で大震災を経験した直後の時期である。混乱の中で着任し、それから半年が過ぎた。

このたびの政変で倒された長期政権は、この学振カイロの歴史より長い年月を支配したのであるから、安定した国づくりにはまだ時間がかかると予想され、また政変による混乱は学術畑にも及んでいる。私に身近な考古学分野の例で見てもよい。政変の際の混乱に乗じて、カイロ博物館の所蔵品20数点が不明となったことは知られるが、一方、イブン・トゥールーン・モスクに隣接するアンダーソン博物館が略奪の対象になった際には、地元の自警団がこれを救った美談もある。地方の遺跡では、取締りの弛緩にかこつけての農地や住宅地の考古管理地侵入が深刻であり、政変以来いまだに外国調査隊に発掘調査の許可がおりていないのは、調査者を内偵する公安が機能していないからではなく、治安の回復に自信を持って

ない地方の警察が外国人の受け入れを躊躇しているからと聞く。この夏に現地を訪れた日本の考古学調査隊（筑波大学、早稲田大学、関西大学）は、いずれも保存科学の研究であるか、本来の発掘を遺物整理に切り替えたものであった。

考古学分野でもうひとつ気になるのは、前政権の文化政策が今後どのように展開していくか、という点である。これは、前政権でたいへん著名であった考古行政のヘッドのポジションが誰に代わるか、という種の関心ではなく、前政権の30年間を通じて、観光・情報通信・住宅という問題と深く関わってきた、いわば戦略的な文化遺産の利用のされ方が、どのように変わっていくのか、あるいは変わらないのか、という点である。前政権においては、文化遺産の整備を謳う都市開発の進み具合があまりにも急速で、とても適正な文化政策や保存技術に立脚しているとは思えないという理由から、在地の識者が国際機関に訴える事例もしばしばであった。文化行政の場合には、前大統領夫人の笑顔が開発推進の象徴でもあった。その構造がいま断罪されようとしているが、将来的なビジョンの構築は容易ではない。

手がけられていた開発も戸惑いの表情を見せる。オールド・カイロもその一つである。私がコプト博物館の収蔵庫で資料収集していた1980年代末のオールド・カイロは、焼き物の窯からもうもうと吐き出される黒煙、燃料の砂糖黍の腐敗臭、屠殺場からの血の匂いが立ち込める場であった。うっかり村の中に入っていくと、住民から石や空き缶を投げつけられた。それが前政権の後期には、歴史的な文明を包括する大博物館建設計画が進み、初期イスラーム時代の最も貴重な遺跡の最重要部分のみを緑豊かな公園からパノラマで楽しむ空間の創出がめざされた。さらに住宅やショッピングモールを充実化させることによって、オールド・カイロをカイロ空港とピラミッドゾーンを結ぶ「観光の節」とする驚くべき整備が急速に進行した。今、博物館の建設は進む一方で、遺跡公園を照らす筈だった新設の街灯の電線は略奪されている。迷える姿は、文化行政の末端にも影を落としている。

研究を志す日本の学生たちへの影響はどうであろうか。幸いなことに、往年より数は減ったとはいえ、政府や民間の奨学金で派遣された若手留学生たちは、それぞれ専門の道で活発な研究活動を行っている。私の役回りは、こうした中東研究の熱意を消さないことであろう。さらに欲を言えば、人文社会系の分野だけではなく、理工系の分野の研究に光を当てるのが課題といえようか。学振のプログラム・レベルでは、エジプトと日本の学術交流史は圧倒的に理工学の分野に集中している現実がある。技術支援や人物養成に重点を置く JICA の事業のみならず（エジプト・日本科学技術大学（通称 E-Just）は工学分野、大博物館建設計画は保存科学の領域である）、学振でもこの傾向が顕著なのは、科学技術を基盤とした研究連携の指針がエジプト政府の側に強くあるからだ。理工学分野での共同研究は、日本サイドからも多くの応募がなされていて、採択は難関である。とこ

ろが、どういうわけか、こうした興味深い研究がカイロに住む私たちに身近になってこなかった。今後、学振カイロでは、理工系分野での学术交流の話が、中東研究と同じくらい親しみ易い話題になる仕掛け作りをしていこうと思っている。
(長谷川奏)

会員の異動

【所属先・連絡先の訂正・変更】

相島 葉月

今松 泰

奥田 敦

鎌田 由美子

木我 公輔

金城 美幸

黒宮 貴義

佐藤 健太郎

菅瀬 晶子

高橋 圭

多田 守

大工原 桂

中島 隆晴

錦田 愛子

貫井 万里

林 玲子

平川 大地

藤木 健二

溝渕 正季

桃井 治郎

吉田 敦

吉村 武典

Mohammad

Qasim

Wafayazada

【新入会員】

山田 亜由美

藤井 菜津子

三倉 康博

寄贈図書

【単行本】

奥田敦、中田考編著 『イスラームの豊かさを考える』丸善プラネット、2011年
八木久美子 『グローバル化とイスラーム—エジプトの「俗人」説教師たち』世界

思想社、2011年
細井長 『アラブ首長国連邦 (UAE) を知るための 60 章』 明石書店、2011年
吉枝聡子 『ペルシャ語文法ハンドブック』 白水社、2011年
清水直美、上岡弘二 『ゴム州の聖所』 *Studia Culturae Islamicae* No.98, MEIS Series No.15, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2011年
近藤信彰編 『ペルシャ語文化圏史研究の最前線』 *Studia Culturae Islamicae* No.99, MEIS Series No.16、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2011年
Crossroads between Latin Europe and the Near East: Corollaries of the Frankish Presence in the Eastern Mediterranean (12th-14th centuries) (Istanbul Texts and Studien 24), Ergon-Verlag GmbH, 2011
Hoşsohbet: Erika Glassen zu Ehren (Istanbul Texts and Studien 25), Ergon-Verlag GmbH, 2011

【逐次刊行物】

『人間文化研究機構現代中国地域研究推進事業実績評価報告書』 人間文化研究機構地域研究推進委員会、2011年
『人間文化研究機構のあり方の検討状況一経過報告』 人間文化研究機構地域研究推進委員会、2011年
『東方學會報』 No. 100 財団法人東方学会、2011年
『日本クウェイト協会報』 No. 226 日本クウェイト協会、2011年
『国立民族学博物館要覧 2011』 国立民族学博物館、2011年
『月刊みんぱく 9月号』 国立民族学博物館、2011年
『一神教世界第2巻 The World of Monotheistic Religions』 同志社大学一神教学際研究センター、2010年
『一神教学際研究 6』 *JISMOR Journal of the Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions*、同志社大学一神教学際研究センター、2010年
ILCAA (Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa) 2011、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2011年
Middle East Panorama, Vol. 1, Issue 1, The University of Utah, 2011
Bulletin of the School of Oriental and African Studies, vol. 74, no. 2, Cambridge University Press, 2011
Bulletin of the American Research Center in Egypt no. 198 Annual report, American Research Center in Egypt, 2011
Journal of the American Research Center in Egypt, vol. 46, The American Research Center in Egypt, 2010
Saudi Aramco Annual Review 2010, Saudi Petroleum limited, 2011
Saudi Aramco 2010 Corporate Citizenship Report, Saudi Petroleum Limited, 2011

事務局より

早いもので新事務局が開設されてから既に半年が過ぎました。本年は AFMA 大会などの大きな行事もなく、例年と比べて事務の負担が少なかったと言えます。それから飯野さん、安川さんが前事務局時代から継続して仕事をしてくださっているという点も事務処理をスムーズに行うことができた大きな理由だと考えています。事務局が移動するたびに事務処理のシステムを一から作り直すというのは大変手間と時間がかかり、学会全体としても大きな損失になります。そうすると、事務所を借りて専属の事務員を雇用するという話に行きがちですが、学会の規模を考えると予算的に難しいというのが現状です。残る道は、コンピュータとウェブを利用した事務作業の効率化でしょうか。

このように、言うのは簡単ですが、いざ実行するとなると大変難しいことを思い浮かべながら日々を過ごしています。会員数 700 名というのは、事務作業を外注するには予算が足りず、自前で行うのも負担が大きいという、微妙な規模なのかもしれません。しかし事務作業の継続性ということを考えれば、変化はゆっくりでいいとも考えています。

(新井和広)

編集後記



庄内柿のおいしい季節。学会創設時の重要なメンバーのお一人であった中岡三益先生が亡くなりました。当時としては(!)中東研究者のなかでは一番のイケメンだったお姿が偲ばれます。

ニューヨークのウォール・ストリートでの街頭活動も、《アラブの春》に端を発したといわれるのに、今ひとつ中東研究に弾みがついていると感じられないのは、私の感覚が鈍っているせい…？そんなことを考えていると、トルコ東部から地震の報。いつも編集作業を終えようとする時に大きな出来事が起きているなあ、今年は。

(山岸智子)

会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。2012 年度会費の郵便振替用紙、あるいは、それ以前の会費に未納がある方には、該当する年度も明記した郵便振替用紙、が同封されておりますのでご利用ください。AJAMES に未送付分がある場合は、2011 年度以前の未納分会費の払込確認後お送りいたします。会費納入率は低い状態が続いており、学会事務局の運営にも支障を来しかねない状況です。是非とも会費納入を宜しくお願い申し上げます。請求会費額は 2011 年 9 月末の入金確認に基づいておりますので、その後に納入され、請求に行き違いが生じた場合にはご寛恕ください。

日本中東学会ニューズレター 第126 号

発行日 2011 年 11 月 5 日
発行所 日本中東学会事務局
印刷所 東洋出版印刷株式会社

日本中東学会事務局

〒223-8521
神奈川県横浜市港北区日吉 4-1-1
慶應義塾大学商学部
新井和広研究室内
日本中東学会事務局
電話/ファクス：045-566-1247
E メール: james@db3.so-net.ne.jp
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/>
郵便振替口座：00140-0-161096（日本中東学会）
銀行口座：三井住友銀行渋谷支店（普）5346808
（日本中東学会 代表 白杵 陽）